

塩田章様（陸士59）

の思い出

喜田 邦彦 陸自66

謹んで塩田章様のご冥福をお祈りいたします。

私は、塩田様より17歳ばかり若く、平成25年から『偕行』の常勤編集委員を務めてきました。当時の塩田様は副理事長であられ、大局的な観点からのご指導や、毎年1本程度の玉稿を賜ってまいりました。

私が編集委員になった当時の偕行社は、経費削減の一環として偕行誌の発行回数を減らすかどうかが、問題になっていました。1・2月号と、7・8月号を合併し、年間10回の発行にどうも、財政規律（歳出歳入の均衡）の維持に寄与するという案です。

事務局のこの案を支持したのが、なんと故・戸塚編集委員長であり、これに反対（機関誌の毎月刊行）したのが当時の塩田副理事長でした。私自身は、「毎月発行すべし」と、戸塚氏の説得に努めたのですがかなわず、理事会で空気が「財政規律を守るべし、合併号の推進」へと傾いていました。私は理事会への出席が許されないの

で、心ひそかに毎月刊行で孤軍奮闘されておられる塩田様のご活躍を期待しましたが、結局、理事会、評議会で合併号が承認されました。論争の焦点は、「毎月刊行の必要性・理念か、可能性・財政か」だったと、考えていました。

その後、「塩田章（元国防会議事務局長）オーラルヒストリー」を読む機会に恵まれ、「そうか、塩田様の必要性論はこれだったのか」と気付いたのです。その本には、フォークランド紛争におけるサッチャー首相の対応を、塩田様が高く評価していたことが書かれていました。

「アルゼンチンの不法侵攻に対し、サッチャーは外務大臣と国防大臣の2人と呼んで『断固戦うべし』と決め、パッと命令が出ていくわけですね。大蔵省なんか列外ですよ。（英国の戦争内閣は閣僚）全員の同意が必要ですが、（私は）防衛局長でしたから、非常に印象に残っています」と述べておられた。

防衛局長であられた塩田様の思考は、「可能性」でなく「必要性」。不法に対する「正義」と、ここぞの際にジョブル魂を見せる「理念」への共感だったと、改めて驚きと感動を受けました。軍人から戦後は官僚になられたわけですが、その思考と行動は「武人」として筋が通っていると思つたのです。もう一つ、直接ご指導を頂いたこと

を紹介いたします。「偕行」編集委員になり、塩田様のご著書『会者定離』を拝読し、簡潔で読みやすい文章と内容に感銘を受け、「偕行」へのご投稿をお願いしました。「めくら（ママ）蛇に怖じず」の態度に、戸塚編集委員長（当時）は、「大先輩に対して大丈夫か？ まあ当たってみなさい」とのことでした。

お願いしてみると、原稿用紙に手書きの原稿が届きました。これを、パソコンで打ち直し、文字をチェック（校正）し、ゲラ原稿に仕上げ、それを筆者・塩田様にお返しして高関を頂くのが、編集のルーチンワークです。

しかし平成27年の「深夜の靖國参拝」原稿の高関では、ご指導を頂きました。「御霊に想いをさせる」という内容でしたが、私は「想い」の部分を「思い」に統一し、パソコン原稿を仕上げたところ、「おもう」には「思う」「想う」「憶う」「懐う」がある。時世、対象、重さ等に応じて使い分けるべきではないかと、示唆を頂いたのです。

「偕行」は「英霊に敬意を」を掲げています。まったくもって、恥ずかしさを通り越し、「編集委員失格」だと痛感したのです。

塩田様は、国会公弁にもあたられました（平成28年1月号）。官房長として総理へのレクチャーも担当されました（平成29年1月号）。後々まで残る「言葉の重み」、政治にかかわる「言葉の

正確性」、想いの深さを伝える「言葉のニュアンス」。それを教えていただき、至らなさと勉強の必要性を教えてくださいました。塩田様は正に「文武両道」、「腹の座った先人」でした。

最近、広幼後輩の田中正和様（陸士60）が老人ホームを訪問され、塩田様の近況を伝えてくださいました。「偕行」（昨年11月号）に掲載した際、ご自分が広島カープのユニホームを着用したお写真をご覧になり、大変喜んでおられたと聞き、安堵いたしました。

奥様、お嬢様も偕行社に付き添いでお越しいただき、「ここに来てパバの元気な姿を見ることができ、安心しました」と言われたことが、つい最近のように思い出されます。

ご家族皆様のお嘆きはいかばかりかと拝察申し上げます。至らぬ後輩であり、申し訳ありませんでした。どうか天国から、「偕行」を見守り続けてください。安らかに眠りくださいませ。

合掌

